

膜の様式で都市を丸ごと里山化する～都市と自然を結ぶ竜たち

都市を里山化する。都市に里山的環境をつくるという意味ではない。都市を新しい文脈で読み替え丸ごと全部里山化するのだ。都市とは何かという問いに対して、里山という様式でこたえる。まさか、そんなことできるわけないと思うだろう。でも、私はできると思っている。

里山は手つかずの原生自然とは異なり、人と自然との長い間の対話をとおして生まれた空間、と云うよりは場だ。近年里山の豊かな文化や生物多様性が注目されているが、その背景には、自然と人間との繋がりや対話を取り戻そうという動きがあるように思える。里山の文化には、人間と自然を分ける二分法や二元論の発想は無い。内部と外部を分ける壁が無いのだ。「人間という内部」と「自然という外部」では分けられない世界観が、里山にはある。そこに人々は、新しい世界観を見出そうとしているのかもしれない。

里山には何故豊かな自然や生物多様性があつたのか。人間が利用しない余白部分(未利用地)に自然(生息環境)が残されていたからではない。里山全体が自然と人間との繋がりによって生まれるひとつの場であつたからだ。場は、場所のように限定されない。場は地域や人々の暮らしの全てを被う様式としてあつたからだ。

都市を里山化するには、まず、私達が日頃慣れ親しんでいる人間と自然、都市の内部と外部といった二分法や二元論、つまり壁の様式を捨て去る必要がある。壁の様式によって、二項対立が生じ、人間か自然かという選択の魔に陥ってしまうからだ。都市には確かに郊外や農村部などの外はある。けれども、都市を里山化するには、それらの外を外部化してならないのだ。里山空間では、内と外は簡単に分けられない。内と外には常に交流や対話があるからだ。それは、生命の様式とも云える。生命現象は、内と外との間にある膜の働きや効果を通しての交流や交換や対話から生まれる。生命の様式は、膜というひとつの様式でもある。つまり、里山は膜の様式なのだ。

里山化を自然と人間の一体化などと、安易に収めるつもりはない。膜の様式は、もっと面白いからだ。膜は、コミュニケーションを生み出す隔たりであり、仕切ることで働きや作用を生み出す距離でもあるからだ。隔たりや仕切り、距離が生み出す繋がりという発想が面白いし、それは多様さに向けた生き方や社会の可能性をさえ、わたしに感じさせてくれる。

日本には西洋や中国のような堅固な壁で囲まれた城郭都市が無い。日本の都市は分厚い壁ではなく、膜のようなもので囲まれていたイメージを持っている。膜は、目に見えないくらい薄く多くのものが通り抜けることができ、都市と農村は常に何かが行き来し対話していた。かつては、生命の様式、膜の様式を持つ都市があつた。その証拠に、シーボルトなどの外国人が当時江戸を訪れた折に、街中で見た多様な生物、野鳥や昆虫、動物などの多さに驚いている。しかも、江戸は18世紀初頭には人口が100万人を超え、世界最大の都市になっていた。

ここからは、私の中で動き出したイメージのままに述べてみよう。都市を囲む膜は、波打ち複雑に曲がりくねりながら多数の壁をつくる。壁は所々で手を伸ばすように細く長く延びて竜の形になる。何匹もの竜が都市を囲んでいる。何匹かの竜は、都市の中心に向かって延びている。私に、竜たちのイメージを浮上させるのは、里山を代表する谷津と呼ばれる細長い谷地形だ。

谷津の周囲には森があり湧水が豊富なので、縄文の昔から人々が住み着き、谷間では早くから水田稲作が行われてきた。人々は、それぞれの土地に棲む竜たちと対話をしながら、地形や風土を生かした生活様式を創り上げてきたのだ。

中でも大都市東京は、数多くの竜たちに囲まれ、中も被われている都市だ。もしかしたら、東京ほど多くの竜が棲んでいる都市は無いかもしれない。国内最大の平野である関東平野の中心にある東京は一見平坦に見えるが、実は起伏に富んだ複雑な地形で、土地の多くが霞ヶ浦流域と同じ竜状地形(谷津)に被われている。古くから都市がつくられてきた東京の都市部は、ブルドーザーなどの重機による土地改変が行われず里山の竜状地形がよく残っているからだ。東京に坂が多いのは、そのためだ。そして、大都市東京に里山の竜がまだ所々に生きている証拠がある。それは、各所の谷底に今も残る湧き水の存在だ。

竜の一大棲息地東京を代表する竜が、都市文化の発信地原宿周辺に棲息している。明治神宮の森や代々木公園がある代々木台地を囲むように、Y字に枝分かれした竜状地形(谷津)が今も残されている。ここには、湧き水もある。かつて竜(谷津)の中を流れていた湧水の豊富さは、葛飾北

斎が描いた「隠田の水車」を見れば想像できる。そして、隠田川などのかつての川が今も地下を流れ続けている。地下水だけではない。東京には、様々な時間が層を成して流れているのだ。

東京は面白い都市だと思う。近代都市への形成期に都市の中心に大きな森を作った東京のような都市は、他にあるだろうか。少なくとも、その森が近代化の真逆をいく古代からの自然崇拜の伝統を引き継ぐ鎮守の森であるという例は、世界にひとつも無いだろう。しかも、この森を作った人達は、植生の遷移を見据えた百年後二百年後のビジョン(潜在する自然植生)を描いていた。ロラン・バルトは、東京には「空虚な中心」があると言っていたが、その空虚な中心からは、古代の風が流出しているのかもしれない。

実際に、風は流れ出ている。東京の中心部にある大きな森、明治神宮の杜や代々木公園からは、真夏にヒートアイランド化した都市へと森が冷却した空気が流れ出ている。小高い代々木台地にできたクールアイランドから、森で冷やされ重くなった空気が、低い方へと古代からの地形である竜状地形の中を流れて行く。つまり、森からの涼風が、代々木台地を囲む竜の形をした谷谷へと流れて行くのだ。古代の面影を持った森から、古代の面影を残す地形へと風が流れて行く様子を想像してみたい。実際に、神宮の森から街へと流れ出る涼風を直に感じたければ、真夏に JR 原宿駅のホームに立ってみるといい。目の前の神宮の森から流れ出て来る涼風を、誰もが体感することができるはずだ。

竜の谷に流れ込んで行った森からの涼風に乗ってトンボや蝶が移動する。変温動物である虫たちは夏の高温に弱いからだ。夜になれば、カブトムシやヤモリなども風の道を移動するだろう。つまり、都市の中の竜たちは、森の風や生き物達の道として今も生き続けているのだ(水の道も地下に潜在している)。この竜たちを蘇らせ浮上させる都市づくりの発想や、新しい膜の様式の発明が、都市を里山化することに繋がるのだ。

私達は、都市のデザインや様式を生み出す活力に満ちた原宿という土地に棲む竜たちの存在に着目して、数年前から或るプロジェクトを進めている。人々が、縄文時代の太古からここに棲む竜(谷津)と向き合いながら暮らし、その時代その時代の様式をつくり、石器や土器、洋服などの様々なデザインを生み出してきた。今はコンクリートやアスファルトで被われた土地でも、そこに暮らす人々が再び竜たちの存在に気付く、新たな都市の様式やデザインを生み出すことができるのではないか。私たちには、都市に眠る里山の竜を目覚めさせることができるだろうか。私はできていると思っている。新しい様式の発明は、楽しいし面白いからだ。

地形は都市の制約ではなく、様式となるだろうか。それは、東京のそして日本の未来を左右する課題だと思う。例えば、近代建築の巨匠コルビュジエは、「ヴェニスは、水面のお蔭で釣り合いを乱すものは何もない」と述べている。

都市の緑化が緑の量を評価するものだとすれば、それに対する都市の里山化は緑の文脈化を意味している。この文脈化、里山の文脈を作ることこそが、都市の個性を取り戻す鍵になるだろう。わたしは、東京を田園都市にしようと言っているのではない。コルビュジエは都市のあり方について「歓待する自然を、都市そのもののの中に導入させるよう提案する」とも言っている。わたしは、彼が言うように「都市を再建し、諸条件を満たした現代のプランに従って建設する代わりに、都市を放棄するというのは間違った都市計画」だと思う。わたしは、都市を否定はしない。

21 世紀は環境の世紀であり、また都市の世紀でもある。大都市東京を里山化することができれば、世界を変えることもできる。前世紀からの近代化の波によって、世界の都市は画一化し個性を失いつつある。今それらの都市を、再びその土地固有の自然や文化、歴史などを生かした個性豊かな都市空間へと変貌させていく道筋が模索されているのではないか。いま都市のあり方が問われている。

国際化を標榜し、従来通りただ外に向けて開いていくだけの都市は個性を失っていくだけだが、その土地の自然や地形等といった風土(固有性)に目を向け積極的に生かしていくことができれば、都市は外に向けてより創造的に開いていけるのではないか。それは、閉じることでより開いていくという、グローバル化の時代を生き抜くための様式でもある。様式を生むことは、そもそも自らを膜で包むこと、つまり、閉じることで開くことである。それは、都市を丸ごと芸術空間に変容させることでもある。

都市を丸ごと包む膜、それは、すでに都市に潜在している。自然と人間の対話の場である里山を生む膜の様式を、都市に浸透させるのだ。膜の様式を持って大都市東京と向き合えば、近代化によって築かれた分厚い壁を溶かし膜に変え、都市を丸ごと里山化することができるかもしれない。それは、膜の様式、生命の様式を持つ都市の出現である。

ビジョンとは、ただの未来図や目標提示ではない。ビジョンとは、潜在する可能性を浮上させる場が創出されたときに、初めて描くことができるものだ。だとすれば、大都市東京のビジョンとは、都市に潜在する里山を浮上させる場が創出できた時に、初めて描くことができるのではないか。私はそれを SATOYAMA ビジョンとして、これからも発信していきたい。

2013 年 7 月 30 日